『クリスマス・キャロル』における時間要素

青木　健

(一)

『クリスマス・キャロル』(*A Christmas Carol*)(一八四三)[1]の第四節の結び近くで、〈改心〉したスクルージは精霊に向って次のように叫ぶ。

「わたしは心の中にクリスマスを尊び、そして一年中それを守りましょう。過去、現在、未来の中に生きましょう……。」(126)

「過去、現在、未来の中に生きる」とはどういう意味なのであろうか。この問いに対する解答は単に『キャロル』の世界を理解することのみならず、〈時間と人間性〉に対するディケンズのヴィジョンを考える上で重要である。スクルージの〈改心〉があまりに唐突に過ぎ、非現実的であると批判するのは比較的容易である。[2]と同時に、そのような批判はディケンズの世界を理解するにあたってあまり有効とも思えない。それより〈改心〉のプロセスとその意味を仔細に吟味する方がはるかに実り多い作業と思われる。さて、先に提出した問いに答えることは物語の中で与えられる独自の〈時間的価値〉及びその〈意味〉に言及すること

であり、さらに、〈主題〉とのつながりを考察することでもある。

周知のように、『キャロル』は〈過去のクリスマスの精霊〉、〈現在のクリスマスの精霊〉、さらに〈未来のクリスマスの精霊〉の導きにより、スクルージが自己の過去、現在、未来の姿を観て教訓を得、守銭奴から寛大な人物に生れ変わる寓話的物語である。そこにはクリスマスという特殊な時間を中心に多様な時間の相が提示されており、その各々に主題と結びついた意味が内含されている。物語的現実（クリスマス・イヴからクリスマスの日、さらに二十六日の朝に至る）の枠の中で、三人の精霊に案内されて、スクルージが体験する物語内の虚構の過去、現在、未来の各時間、さらに〈改心〉のプロセスに従って変容する彼の時間意識及びそれと対比される時間意識等々多様な時間が縦横に物語内にはりめぐらされている。

以下の試論で、物語に提示されている時間相を分類した上で、それらに暗示された道徳的意味を主題との関連で考察し、最終的に先に提出した問いに答えたいと思う。

三人の精霊出現以前の物語冒頭に既に物語全体に見出される時間相が示され、その複雑で複合的な価値がほぼ決定されているのでまずそこから考えてみたい。

この物語は次のような言葉で始る。

> まず話のはじめから言うと、マーレイは死んだのである。（45）

語り手――読者に対して親密な態度を終始とっている――はこう語り出して、スクルージのかつての同僚マーレイ（Jacob Marley）の死に言及する。作品の冒頭における〈生と死〉の対比はディケンズの多くの作品に見られるが、それは〈人間存在の有限性〉"mortality"を強調するものである。『オリバー・ツウィスト』ではオリバーの誕生と実母の死とが物語冒頭で同時的に描かれ、『ディヴィッド・コパフィールド』ではディヴィッドはまだ物心つく前に母を喪くし苦難の人生に船出し、ポール・ドンビーは母親の死と引き換えにこの世に生を受ける。また、『大いなる遺産』の冒頭、ピップは両親と兄弟達の墓を前に人間の生と死を実感する。物語の冒頭で示される〈生と死〉の対比は主人公の孤独を浮き彫りにするが、半面それは〈人間存在の有限性〉の確認を迫ることでもある。

次いで示される時間は時計によって測られる〈直線的量的時間〉であり、スクルージの性格描写と深くかかわっている。彼は常に「時打ち懐中時計」“repeater”と「教会の古さびた塔」(55)から聞える鐘の音に従って毎日の生活を送っていた。時計は文字通り機械的非人間的要素を帯びており、ディケンズはそれによって時間の経過を示すのみならず、人物の非人間性を暗示する。スクルージと同系統の功利主義者ドンビー氏は鎖つき金時計を常に携帯し、〈ステイタス・シンボル〉にしている。『大いなる遺産』では老ハヴィシャム嬢の凝固した精神を象徴するかのように彼女が住むサティス・ハウスの時計の針は八時四十分を指したまま停止している。正確で容赦ないその時間は習慣となったリズムに従って昼夜の別なく流れ去って行く。客観的事実や数字以外は信用せず、固く非人間的で頑なで、自己の利益のためには他者を顧みない守銭奴スクルージはこの時計的時間の世界の住人である。後述するようにディケンズはスクルージの〈改心〉のプロセスをこの時間意識の瓦解の過程として描き出している。

次にわれわれの前に提示される時間は時計的直線的時間と対極にあり、最初スクルージの甥のクリスマス観に暗示されている。スクルージのクリスマス観と対比させてみるとその特徴が明確になるので次に両者を比較してみる。まずスクルージはクリスマスを祝う甥の言葉に次のように反論する。

「……クリスマスおめでとうだって！　クリスマスおめでとうも糞もあるもんか！　クリスマスはお前にどういう時かね？　金もないのに勘定を払わなければならん時じゃないか。一つ年をとるということを知るだけで、一時間だって別に金持ちになることはない時じゃないか。また帳簿の清算をして、その中のどの項目もまる損だということが十二か月の総締でわかる時じゃないか。」(48)

スクルージにとり、クリスマスの時節は「金もないのに支払いをしなければならない時」として意識されており、時間は経過するにしたがい貨幣の蓄積が伴わなければ無意味となる。「一つ年をとるだけで一時間だって金持にならない」という〈時間意識〉のもとでは、時間と貨幣価値は等価であり、金を生み出さない限り時間に意義を見出すこと

はできない。〈時間〉＝〈利得〉というスクルージの〈時間意識〉はさらに書記にクリスマス休暇を与える際の会話の中で鮮明になる。

「君は明日まる一日、休みたいんだろうね？」
とスクルージは言った。
「ハァ、もしよろしければ」
「よろしいこともないし、また公平ではないね」とスクルージは言って、「わしがそのために二シリング半さし引くとしたら、君はきっとひどい待遇を受けていると思うだろうな？」
書記はかすかに笑った。
「それでも、何もしない者に一日だけの給料をわしが出したとしても、君はまさかこのわしの方がひどい目にあっているとは思わんだろう」
書記は、一年にたった一度のことですからと言った。
「毎年十二月の二十五日がくるたびに、ひとの懐から金を掠めとるというにしてはまずい言訳だね！」（53）
雇い人に休暇を与えることはスクルージの意識では「毎年十二月二十五日がくるたびに懐から金を掠めと」られることであった。彼にとり、人間の〈有限の一生〉は金の蓄積が伴わなければ無意味となる。

このように、スクルージの功利主義的人生観が〈直線的量的時間意識〉に表わされるのに対して甥の〈時間意識〉はクリスマス観を通して次のように示されている。

クリスマスがやってくると――その神聖な名と由来に対する尊敬の念とは別に（クリスマスに属しているものを、それから切り離して考えることができるとすればですね）――いつもこれはよい時節だなと、本当に考えるんですよ。やさしい、寛大な、情にあつい、楽しい時節なのです。男も女もみな一つになって、閉じきった心をすっかり開いて、自分より身分の低い人々を、おのおの違った旅路を行く別の人種ではなく、墓場まで行を共にする本当の道づれと考えるように思われる。一年の長い暦の中で唯一の時だと思います。それですから、クリスマスだからと言って、金や銀のかけらだって自分のふところに入ったことはないんですが、叔父さん、僕はクリスマスで得をしてきたと信じていま

す。これからも得をするでしょう。だから、僕は言います――「神よ、クリスマスを祝福したまえ！」(49)

右の言葉には〈友愛〉、〈連帯〉、〈無私〉、〈自由な精神〉、〈平等〉等のクリスマス精神が過不足なく示唆されているが、同時に重要な〈時間相〉が暗示されている。「クリスマスが「毎年」やってくるごとに」という表現はR・L・パティンが指摘するように[3]、〈円環的時間〉を示しており、スクルージの「まるまる十二ヵ月」という表現と鮮やかな対照を見せている。それは〈円環的〉である故に〈再生〉のイメージを持ち、時計や暦で測られる慣習的機械的あるいは直線的量的時間とは異質な時間相である。後者が絶えず人間を束縛し、制約を加える傾向にあるのに対して、前者はそれからの解放と自由な精神を暗示している。それは量的に見られるのではなく、意義深い充実した時間である故に〈質的時間〉と言い換えることもできよう。この〈質的時間〉はクリスマス精神と結びついてスクルージの意識変化に大きな影響を及ぼすことになる。

さて、スクルージと三人の精霊との出会以前に提示される第四の時間は〈宗教的永遠の時間〉である。それは聖書の世界と関連し、キリストの降誕祭としてのクリスマスと密接な関係を保つとともに、スクルージの〈改心〉の促進に他の時間相と同様、大きな役割を演じている。

この時間はマーレイの亡霊が出現する直前に提示される。スクルージが大衆食堂で味気ない夕食を終えて自宅に戻り、煖炉の前に腰を下ろした時、ふと目に映じた煖炉のタイルに描かれた聖書の絵模様の中に暗示されている。カインとアベル、子供のモーゼに同情したパロの娘達、シバの女王、天使、聖なる使徒達の絵はスクルージの世俗的な世界と対照的な〈聖なる世界〉を暗示するとともに、兄弟や同胞の間の愛と責任の重要性を示唆している。この聖書の絵の描写の直後、ふだん使用していないベルが一斉に鳴り出すというゴシック小説的道具までが加わり、スクルージは動揺し、心は不安定となって、従来の時間意識は徐々につき崩されて行く。「リピーター」と近くの教会の鐘の音によって測られていた彼の時間は今やその計測が正確さを失ってしまう。

これ「一斉に鳴り出したベルの音」はほんの三十秒か一分しかつづかなかったかも知れないが、一時間ぐら

いも長く思われた。(57)

スクルージの〈改心〉は時間意識の混乱からまず始っている。

以上のように、マーレイの亡霊出現までに、物語全体に見出される多様な時間の相と種類及びその意味が決定されている。一、〈人間存在の有限性〉、二、〈直線的量的時間〉、三、〈円環的質的時間〉、四、〈宗教的永遠の時間〉。今大雑把に分類するとすればこのように分けることができる。(4) これらの時間相は三人の精霊に象徴される過去、現在、未来の時間の中に散在し、主題を浮き彫りにする機能を保っている。次にこれらが物語展開及び主題とどのように結びついているかを具体的に吟味してみよう。

(二)

〈人間存在の有限性〉を暗示するマーレイの死は当初スクルージにほとんど影響を与えない。たしかに彼はマーレイの「喪主」"chief mourner"であり、「唯一の指定遺言執行者」"sole executor"であり、「唯一の管財人」"sole administrator"であり、「唯一人の譲受人」"sole assign"であり、「唯一人の余産受遺者」"sole residuary legatee"であった。しかし、この「唯一の友人」"sole friend"は彼の葬式の日にさえ取り引きをして儲けようとしている。妻の臨終に際しても心にいささかの動揺もきたさないドンビー氏の場合と酷似した彼の凝固した精神はほとんど唯一の友人の死にもさしたる衝撃も受けず、生活のリズムも少しも狂わない。彼の心は「といし」"grindstone"であり、「火打ち石」"flint"であり、そのうちとけない姿は「カキ」"oyster"そのものであった。他の世界と隔絶し、冷たく孤独なスクルージは外界の暑さ寒さの影響を受けず、まるで死者のように天候に反応しない。〈アルター・エゴ〉的存在であったマーレイが肉体的死を招いたのに対応して、スクルージ自身には精神的な死が訪れているのである。彼に対しては人間はもちろん、乞食の盲導犬でさえ避けようとするが、彼の方でも他者を無視することに「快感」"nuts"を覚えている。

〈人間存在の有限性〉は当初このように彼には無縁な意識であった。しかし、それはマーレイの亡霊の出現によって初めて脅かされる。

マーレイの亡霊はベルの音とともに鎖を引きずるような音をたててスクルージの前にその奇妙な姿を現わす。

彼がひきずっている鎖は胴のところで留めてあった。鎖は長く、彼のまわりに、尻尾のようにうねりくねっていて、現金入れ函や鍵や南京錠や台帳や証書や鉄でできた重い財布などでできていた。(57)

生前スクルージとともに利潤追求に狂奔していたマーレイの我欲が「現金入れ函、鍵、南京錠、台帳、証書、財布」からなる「鎖」に象徴されている。彼は無気味な〈死の世界〉と〈現世〉との関係を次のように語る。

人間はだれしもその心のうちに持っている精霊が人間の間をあちこちと歩き、あまねく話をしてまわらなければならないことになっているのだ。それで、もしその精霊が生きているときに出て歩かなければ、死後に出て歩くように定められている。(61)

「仲間の人間の間をあちこち歩き、あまねく旅をする」とは〈人間同士の心の交流〉を示すのであろう。スクルージの甥のクリスマス観の中の言葉――「墓場まで行を共にする本当の道づれと考える」――とともに現世の有限性とその中で果たされるべき人間の義務と責任が強調されている。マーレイの亡霊はさらに次のような後悔の言葉を吐く。

「おお、囚われて、縛られ、二重の鎖につながれた者よ！」と亡霊は叫んで、「この世がよくなって、人々が十分に利益を受けられるようになるまでは、崇高不滅の人々が幾時代かにわたって不断につくした努力も永遠のとこやみに消え去ってしまうのだということを知らないとは。どんなところにせよ、その小さな範囲で、自分にふさわしくはたらいているキリスト教徒のたましいも、ひとのために役立つという自分の大きな使命を果たすには、その一生があまりに短いことを嘆くだろうということを知らないとは。自分の一生の機会をひとたび誤まったならば、どんなに永い間後悔しても、その償いはできないということを知らないとは！　だが、このわしがそうだった！　あ、わしがそ

うだったのだ！」(62)

マーレイの亡霊の血を吐くような悔悟の言葉はディケンズがさまざまの作品の中で主張する主題とかかわるものでもある。G・H・フォードはディケンズが「今では遅すぎる」という意識に付きまとわれていたことを指摘して、それがディケンズの「内的な声」"private voice"として作品の主調に影響を与えていると述べている。(55)

一生の短かさと対比的に暗示されている時間の有効な使い方こそキリスト教徒の正しい生き方を指し示すものである。限りある人間の生涯は刻一刻と流れ去り二度と還らぬものであること、それがたしかに現実なのだ。この不可逆的時間を豊かに充実したものにするのでなければ人間存在を十全に自らのものにしたとは言えない。それではどのようにすべきか。この問いに対するディケンズの答えを探る作業は次章に譲り、さしあたりは、〈生と死〉の対比の意味をさらに追ってみることにする。

〈死〉のイメージがスクルージの意識変化に決定的な意味をもたらすのは彼自身の死と書記の息子、ちびのティムの死に直面する時である。未来のクリスマスの精霊の導きによって体験する対照的な二つの死は彼に「かつての自分からまったく違った人間に生まれ変りたい」という願望を強く心に植え付ける。スクルージは自己の死がいかに人々から無視されているかを知るが、皮肉にも、それはかつて死者に対して己れが示した姿勢であった。取引所でかつての商売仲間や、むさくるしい露地裏に住まいかがわしい人物達から一片の同情も得られない自己の死は孤独感を一層スクルージの胸に刻み込む。彼が「過去、現在、未来に生きましょう」と叫ぶのは実にこの直後である。

以上、マーレイの死に暗示された〈人間存在の有限性〉に内含される意味と主題とのかかわりを見た。〈死の世界〉は後述するように、〈宗教的永遠の時間〉と深くかかわっているが、ここではスクルージの意識変化をもたらす直接的な要因という点から考察を加えた。次に、スクルージの性格を象徴する〈直線的量的時間〉の意味と彼の〈改心〉のプロセスとの関係を検討してみよう。

人間相互のコミュニケーションを自ら拒否し、連帯意識を欠くスクルージの性格が彼の「時打ち懐中時計」や教会の鐘に象徴されること、彼のクリスマス観に〈時間〉＝〈利得〉という独自の時間意識が見られることは既に指摘し

た。ディケンズの作品に登場する功利主義者は時計に象徴される〈直線的量的時間意識〉の持ち主である。正確な事実を優先させ、機械的に問題を処理する人々。彼らは客観的に世界を見つめることを生活信条とするが、半面時間に追われ、時間に支配されており、自由な想像力や感覚が訴える力あるいは柔軟な精神を排除し、人間性に欠けた人間となっている。語り手は「市政当局者、市参事会員、商業組合員」(54)に同様の性質をほのめかしている。この世界からの脱出と人間性の回復の第一歩は〈時計的時間意識〉との訣別にあり、スクルージの〈改心〉の序章はこの時間意識の動揺と混乱とから始っている。

マーレイの亡霊の出現の際に鳴りひびくベルの音を正確に計測できなかったように、〈過去の精霊〉出現においてもスクルージの〈時間意識〉は不安定となる。予告の一時間前からスクルージは眼をあけて待っている。

彼のひどく驚いたことには重苦しい鐘の音は六つから七つ、七つから八つ、そして順々に正しく十二時まで打つとそこでやんだ。十二時！　床へ入った時には二時過ぎだったのだ。時計がどうかしているのだ。……彼はこのとんでもない時計の時間を確かめようと、自分の時打ち懐中時計のバネに指をふれた。そのせっかちな、小さい音が十二うってやんだ……。(66)

理性と習慣は否定しようとするが観察の眼は今真夜中だと知らせている。「考えれば考えるほど思考は乱れて行く……果たして夢だったのかそれとも夢ではなかったのか？」(67)スクルージは同じ問いをくり返す。今の彼の意識では正確に時間を測ることができない。まず十二時を過ぎた後の十五分は非常に長く感じられたが、その後一時になるまではほんの一瞬のように感じられる。

それからの十五分は非常に長くて、スクルージは自分が知らないうちにうとうととして、時計の音を聞き逃がしたのに違いないと、一度ならず思ったほどであった。ついにその音がじっとそばだてた耳に鳴り出した。

カン、カーン！

「十分過ぎ」とスクルージは数えながら言った。

カン、カーン！
「三十分過ぎ」
カン、カーン！
「十五分前」
カン、カーン！
「れいの時間だ」とスクルージは勝ち誇ったように、「何も起こらないじゃないか！」彼はまだ時鐘が鳴り出さないうちに、こう言ったのである。その後、低いこもったうつろな重苦しい一時を打った。(67)

ディケンズは意識的に十五分間隔で打ち鳴らされる鐘の音の間に何の注釈も加えず、それによって残り四十五分がほんの一瞬の間に過ぎ去る様子を暗示している。それは〈心理的相対的時間〉に近似したものである。

一般論で言うなら、〈時間意識〉の混乱はもしそれが否定的に働く場合、精神的異常をきたし、アイデンティティを喪失して日常生活に適応できない人を生むであろう。今スクルージの意識の混乱はこれに近い状態にある。半面、同じ忘我の状態にあり、瞬間的にアイデンティティの喪失に近い状態に陥ったとしてもそれ自体統一をもち、自足した瞬間は逆に意識の高揚と熱情に充ち、充実したものとなる。その時、人は陶然として我を忘れ、時間の流れを忘れることができ、ある意味で〈無時間〉の世界に居る。これが『キャロル』の中で示されている第三の時間相である。それはスクルージの〈直線的量的時間〉の対極にあり、〈改心〉の完遂のために彼にその獲得が要求されている〈円環的質的時間〉である。

最初それはスクルージの甥のクリスマス観に示されていること、そして〈友愛〉、〈連帯〉、〈精神の自由〉、〈平等〉等のクリスマスの愛の精神と結びつくものであることは既に指摘した。物語の中でそれがどのような形で展開されているかを次に見てみよう。

それはまず〈過去のクリスマスの精霊〉に導かれてスクルージが観る過去の、あるクリスマス・イヴの光景の中に見出される。スクルージの若い時分の奉公先はフェッウィッグ老人を頭に数人の店員からなる小さなお店であった。ある年のクリスマス・イヴの日、七時きっかりに仕事を止

め、フェツウィッグ老人が仕事部屋を片付けさせると「店は冬の夜にまことに好ましく思えるような、心持のよい、暖い、からっとした、明るい舞踏室になった。」(76) それは日常的習慣的な生活、常に時間の制約を受ける世界から一転して、時間の束縛からの解放を意味する。

フェツウィッグ老人はペンを置いて、時計を見あげた。時計は七時を指していた。彼は両手をこすり、自分のゆるゆるなチョッキをなおした。靴の先から頭のてっぺんまで、体じゅうをゆすって笑い出し、気持よげな豊かな、おうような、陽気な声で呼びかけた。(75)

七時まで機械的に流れていた時間はそれを境にいわば停止し、部屋は〈無時間〉の世界へと変貌する。さらに、〈空間的〉にもそこは〈無限の世界〉となる。次の描写は部屋を片づける様子である。

片づけろだって！　フェツウィッグ老人がちゃんと見ているのだから、彼らが片づけようとしないものもなければ、片づけることができないようなものもなかった。瞬く間にやってしまった。動かすことのできるものはまるで永久に社会から追放してしまうように、どこかへやってしまった。(76)

仕事という肉体的時間的そして空間的な束縛は机とともに「永久に追放され」、愉しい音楽とダンスと御馳走の山がそれにとって代る。年齢や性の区別もなく、貧富の差もなくあらゆる人々を包み込むこの世界には「浮世のうさ」"mortal coil" もエゴもなく精神の自由が横溢している。友愛、連帯、若さと明るさ暖かさ、あらゆるものからの解放等々、クリスマス精神に満ちた世界である。人々は我を忘れ、時間は意識されておらず〈無時間〉の世界なのだが、意義深い充実した瞬間である。スクルージは現在の姿を忘れ完全に過去の若い自分にかえり、舞踏室の人々と一体となっている。

この間じゅうずっとスクルージは正気を失った人間のようだった。彼は身も心もその光景にとけこみ、自分の前身と一体になっていた。……そして言うに言われぬ心の動揺を感じた。(78)

この「動揺」は彼の意識変化を予示するものである。彼の様子をうかがっていた精霊はじらすように尋ねる。

「こういう愚かな連中をあのように有難がらせるのは小さなことだね。」

と精霊は言った。

「小さなことですって！」とスクルージはききかえした。「……そんなことじゃありません」とスクルージは今言われたことに激して、現在の自分でなく、昔の自分になって、思わず知らず言った——（78）

精霊の皮肉はスクルージ自身が物語冒頭で寄付集めに来た二人の紳士に投げつけたものである。アイロニーの面白さを語り手は愉しみながらスクルージの意識変化を示唆している。

同様の光景はスクルージの甥のクリスマスを祝う集いに一層鮮明な形で描き出されている。次の場面には、集った人々がゲームを愉しんでいる様子を精霊とともに観ている内にゲームに熱中するスクルージの姿が描かれている。

老いたる者も若い者も総勢二十人はいたであろう。皆ゲームを楽しんだ。そしてスクルージもそれに加ったのである。というのは、スクルージは今そこで行われている遊戯の面白さにひきこまれて、自分の声が彼らの耳に少しもひびかないことも忘れてしまい、ときどき大きな声で自分の推定を口に出して言った。……精霊はスクルージがこういう気分にあるのを見て非常に喜んでたいへん気に入った様子で彼を眺めていたので、そこの客たちが帰ってしまうまでいたいとスクルージは子供のようにせがんだ。（105）

時間の流れとは無縁な忘我の世界がここにもある。それは直線的な時間の浸食にさらされることもなく自由な精神に充たされ、意識は高揚し、情熱に充ちあふれた瞬間であり、その時人は自足している。大人は子供の意識にたち還り、いわばアイデンティティの喪失を招来しているが、半面それ自体統一をもった世界に浸り切っている。「ディングリー・デル」（"Dingley Dill"）でクリスマスを祝うピクウィック氏同様、子供と化した大人、それは〈再生〉のイメージを内含している。E・L・ギルバートはスクルージの

〈改心〉を子供時代への回帰という視点から解釈している。「スクルージの意識変化を読者に確信させるものはまさに永遠の子供時代と『かけがえのないイノセンス』に向かうこの普遍的な意識にほかならない。」(6)

この〈質的時間〉の体験はスクルージの意識変化を一層促進し、凝固した精神に柔軟性を与える。この直後彼は自己の姿が他者に「不愉快で残忍な動物」(106)と映っているのを知るが、彼の心を支配したのは怒りよりもむしろ「浮き浮きと軽くなった」(107)気分である。

次に『キャロル』に流れる第四の時間――〈宗教的永遠の時間〉――の意味とその機能について考えてみる。クリスマスが何をおいても、キリストと関連した宗教的行事である以上聖なる世界との結びつきは不可欠である。宗教的用語が全篇にほのめかされ、さまざまなレベルにおいて機能しており、〈友愛〉と〈再生〉のテーマを浮き彫りにしている。しかもそれらは決して高等的解釈を必要とせず、日常生活のレベルで、一般庶民の家庭生活と密着した中で描き出されている。

その最初の言及はスクルージの煖炉のタイルに描かれた聖書の絵模様にあることは先に述べた。カインとアベルの関係、子供のモーゼに同情するパロの娘はスクルージに欠ける〈友愛〉と〈連帯〉を暗示し、使徒や予言者の杖はスクルージを訪れる聖なる仲介者を予示する意味を含んでいると思われる。スクルージの甥はクリスマス観の中で「その〔クリスマスの〕神聖な名と由来に対する尊敬の念」に触れ、マーレイの亡霊は次のように自問して、キリストのイメージに言及している。

「なぜかつてのわしは自分と同じ仲間のむらがる中を目をふせて歩いたのだろう？　またなぜ、東方の博士たちを貧しい家に導いたあのありがたいベツレヘムの星を仰ぎ見ることをしなかったのだろう？……」(63)

一方、過去と現在のクリスマスの精霊はともに聖なる世界と永遠の若さを象徴する長衣を身につけてスクルージの前に現われる。「純白の外衣を着て、……手にはみずみずしい緑のヒイラギを持っていた」(68)過去の精霊も「白い毛皮でふちどった緑色の簡単な長衣……をつけていた」(87)現在の精霊もスクルージの〈改心〉に直接手を貸している。

キリストへのほのめかしはちびのティムの願望にもこめられている。

「教会でみんながぼくのことを見てくれればいいなあと思ったよ。なぜってぼくはびっこだからね。クリスマスの日に、だれかびっこの乞食を歩くようにし、めくらの人を見えるようになさったのは誰であるか、それを思い出したら、あの人たちもいい気持がするだろうからね……。」(94)

貧者の間を訪れ奇跡を行ったキリストのイメージがほのめかされていること、救世主と利己主義者の対照が意図されていることも明らかである。このちびのティムにスクルージが「これまで感じたこともないような関心をいだいた」(95)ことはいわば彼がキリストを受け入れる用意があること、さらに言えば、クリスマス精神の是認を暗示している。

以上見たように第四の時間――〈宗教的永遠の時間〉――もまたスクルージの〈改心〉に間接的につながるものであることが理解されよう。

〈人間存在の有限性〉、〈直線的量的時間〉、〈円環的質的時間〉さらには今述べた〈宗教的永遠の時間〉、これら四つの時間相は、過去、現在、未来の時間の中に布置され、一層複雑で複合的な物語世界を織りあげている。

次に、物語内の虚構の時間である過去、現在、未来の意味と主題とのつながりについて検討することにしよう。

(三)

スクルージは〈過去のクリスマスの精霊〉の導きで五種類の過去、〈現在のクリスマスの精霊〉によってクリスマスの朝から夜十二時までの〈虚構の現在〉、さらに〈未来の精霊〉からはちびのティムとスクルージ自身の死を含む〈虚構の未来〉を体験し、これらの虚構時間の中で物語の中心課題が浮き彫りにされる。『キャロル』はスクルージの〈改心〉のプロセスが〈時間〉を媒体に行われ、したがって、〈時間〉は単なる作品世界のリアリティの媒体にとどまらず、道徳的意味の媒体ともなっている。

まず〈過去〉はどのような形でスクルージに影響し、また彼がどのように反応するかを見てみよう。

〈過去の精霊〉は過去とクリスマスの意味を同時に内含するいでたちで出現する。クリスマスの象徴については既に言及してあるので、ここでは過去の意味に焦点を当ててみる。

それは奇妙な姿をしていた――子供のようであるがそうではなく、むしろ老人に似ていた。何か超自然的な媒介物を通して眺められたようなもので、こちらの眼からだんだん遠のいて行ってついには子供の大きさになってしまった。(68)

「超自然的な媒介物」とは望遠鏡のことである。逆のパースペクティヴを通して過去を振り返ると過去の出来事は最後のものが最も近くに眺められる。人間の記憶は時間的距離の大きさに従い不鮮明となり、空間的比喩を用いるなら、それはしだいに小さくなる。それは望遠鏡を逆さに見た光景となるはずだ。さてその体つきと言えば――

髪は老人のように白いにもかかわらず顔にはしわもなく肌はつやつやしている。腕は長く筋肉隆々、手も同じだがその握力は異常に強い。足はほっそりとして、手と同様むき出しであった。(68)

要するに過去は新鮮なのである。何故ならそれはスクルージの過去を象徴するものであり、まだ生々しいものなのだから。また、既に述べたように、「純白の外衣」と「ひいらぎ」は〈聖なるクリスマス〉と〈永遠の若さ〉を象徴し、〈再生〉のイメージを象徴している。一方、頭上から放射されている明るい光は過去を照らす光なのであろう。

しかし、過去の記憶は消えやすく、うつろいやすいものだ。ある瞬間に明確に映った過去の出来事も別な瞬間には不分明なものとなる。その捉えどころのない過去を亡霊の姿は暗示している。

その姿ははっきりしたところが絶えず移り動いていた――今一本腕の化物になったかと思うと次には一本脚になり、また二十脚になり、今度は頭のない二本脚になり、さては胴がなく頭だけになったりした。そしてその消えて行く部分は濃い闇にすっかり溶けてしまい、輪郭がまったく見えなくなった。(68)

クリスマスの時間と過去の時間を象徴するスクルージの過去のクリスマスの精霊はスクルージの五つの過去に彼を導いて行く。老スクルージは自己の孤独な少年の姿に涙し、童話の世界の主人公達との再会に心を躍らせる。作者はこれら童話の〈永遠性〉と〈想像力の愉しさ〉、さらには〈精神の自由〉を約束する文学の力を誇示しながら、同時に孤独な少年に現在のスクルージの心を投影させ、少なからざる衝撃をスクルージに与える。

それからスクルージは彼の平生の性格にはとても見られないような早い気の変わり方で、昔の自分をあわれんで、「かわいそうな子！」と言って、また泣き出した。

「ああ、残念だ」とスクルージは袖口で涙をぬぐってからポケットに手を入れてまわりを見まわしながら呟やいた――「だが、もうおそい。」(73)

過去に対する悔恨の意識は現在の意識に反映され、過去と現在はスクルージの意識の中で交錯し合う。精霊はスクルージを小さな妹（甥の母親となる）と一緒にいる少年スクルージの所へ案内するが、ここでも少年スクルージは孤独の影を背負っている。父親との反目をとりなしてくれる小さい妹の姿、また、学校の校長先生の寒々とした応接間で妹と待っている彼自身の孤独な姿が今は亡き妹との愉しい思い出を心によみ返えらせる。そして、連想はさらにこの亡き妹の忘れ形見、スクルージの甥への愛惜の情へと移って行く。

第三の過去は既に触れたフェツウィッグ老人の店における愉しくも懐かしいクリスマス・イヴの情景である。その時間的意味については検証済みなので略し、第四の過去へと移ろう。それはスクルージに苦い憶い出である。既に守銭奴の萌芽が見られ、婚約者ベレ（"Belle"）は彼の黄金崇拝の姿勢に失望して、次のような言葉を残して彼のもとを去ってしまう。

「……もう一つの偶像がわたしに代ってできたんですもの。……［それは］黄金偶像……あなたは利得で何もかも測るのですから。」(79)

「黄金崇拝」の幻想から覚醒しつつあった現在のスクルー

ジには耐え難い光景である。「もうたくさんです」“Show me no more”(81)と叫ぶが彼はまだ許されず、さらに第五の比較的現在に近い過去へと導かれる。

それは子供に囲まれた幸せな家庭を営んでいるかつての婚約者ベレの豊かな姿である。その暖かな家庭と対照的な現在のスクルージの孤独は彼の心に悔悟の念を深く刻みこむ。語り手は彼の心を代弁して語っている。

このように美しくて、明るい行末をもつ者〔は〕……自分の生涯のうらぶれた冬に明るい春をもたらしてくれたかも知れないのだ……。(82)

クリスマス精神の一つである家庭的幸福は失われた時間を取り戻し老いに活力を与える源となる。そこには〈再生〉のテーマが明確に提示されている。

スクルージは耐えられず、過去の精霊の「消燈帽」を押えつけてしまう。と、いつもの寝室にいる自分に気づき、スクルージは疲労から深い眠りに落ちて行く。

こうして「過去の精霊」の案内でスクルージは自らの過去を眼前に見て、取り返しのきかない失ったものの重さをしみじみと憶いやるのである。その過去は現在から切り離されたものではなく、現在との結びつきが強調されることによって、道徳的意味づけがなされ、スクルージの意識変化が徐々に深化して行く。少年時代の姿に涙し、「アリババだ!」と心を弾ませて叫ぶのは少年スクルージではなく現在の老スクルージであり、フェツウィッグ老人の「舞踏室」での宴を前に忘我の状態にあるのは現在のスクルージである。過去は現在から隔絶すべきものではなく、常に現在と密接にかかわるべきとする理念は初期のものを除けばディケンズのほとんどの作品を貫いている。それは単に『ディヴィッド・コパフィールド』や『大いなる遺産』にみられる主人公自らが過去を語る自叙伝的形式の小説に限らない。〈過去〉が内含する意味の重みに対するディケンズの姿勢は一過性のものではなく、彼の人間性に深くかかわるものである。

自らの過去と直面し、ある程度の意識変化は見せはしたが、〈改心〉の条件はまだ満たされていない。〈クリスマス精神〉の意味の把握が彼に課されている義務だからである。第三節では「現在のクリスマスの精霊」の案内でクリスマスの祝いにわきかえるロンドンの町を訪れ、さらに真

の意味でクリスマスを祝っている二つの家庭（書記と甥の家庭）を観るスクルージの姿が描かれる。

過去の精霊の場合と同様、この精霊の姿と出現の様子は〈クリスマスの時間〉を暗示するものである。

最初、精霊は直接スクルージの寝室に現われず、隣室で彼を待っている。それはスクルージが甥に向ってクリスマス拒否の言葉を投げつけたからであり、半面彼の意識が完全にはクリスマス精神になじんでいないことを示唆している。しかし、隣室はクリスマスを象徴するありとあらゆるもので様相が一変している。「やどり木、ツタ、ヒイラギ」の緑の葉は〈永遠の若さ新鮮さ〉のシンボルであり、「赤赤と燃える煖炉の火」は〈明るさと暖かさ〉を、「酒と肉と果実」その他の御馳走の山は〈豊穣の世界〉をそれぞれ象徴している。精霊は〈クリスマス精神〉そのものを暗示するかのように、手には「豊穣の角」"Plenty's Horn"に似た松明を持ち、「白い毛皮で縁どった緑の簡単な長衣ないしマント」を身につけて〈聖なる世界と永遠の若さ〉を誇示し、「むき出しの広い胸と……腕」で〈自由な精神〉を象徴している。そして、さらに〈自由と解放〉を暗示するように「その褐色の髪は長くのびやかだった――ちょうどそのにこやかな顔、輝く目、ひろげた手、元気のよい声、ゆったりした態度、明るい様子などすべてのびやか」(87)なように。腰に差した「刀身のない、しかも古びたさやは錆びてぼろぼろになっていた」(87)古風な刀は闘いや争いとは無縁な〈平和〉を示唆している。

二人が訪れたクリスマスの町は荒々しい天候にもかかわらず人々の底ぬけの明るさと活気ある声に溢ふれている。立ち並ぶ食料品店、果物屋、家禽商の店先はまさに豊穣の世界そのものである。ディケンズは感覚的な形容詞、コンマ、セミコロン、接続詞、分詞の多用による独特の文体によって品物の豊富さと連続性を示し、得意とする〈アニミズム〉と〈擬人化〉は物体の〈人間化〉を押し進め、あらゆるものが生命と魂を持ち、陽気にはしゃぐ人間と一体となってクリスマスを祝うかのようである。そこでは主体と客体（主と従）の関係はとりはずされ、すべてが平等であり、連帯意識と友愛というクリスマス精神を謳歌している。スクルージに体現される孤絶、排他の意識とは無縁な世界である。人々は鐘の音とともに教会へと急ぎ、パン焼きかまどのない人々はパン屋に急ぎ、口論する者も精霊の松明からこぼれる滴を浴びると直ちに機嫌を直してしま

う。

そこに人間と非人間的存在との間の濃密な関係を見出すことができる。擬人化、アニミズム、感覚的言葉に彩られたディケンズ独特の文体は『キャロル』の主題の重要な要因たる〈連帯〉と〈友愛〉のイメージをクリスマスの朝の情景の中につくりあげて行く。一方、語り手はこのような開かれた世界とともに、それを閉ざそうとする身勝手な一部の心ない人々の「自尊、悪意、嫉妬、頑迷、利己心」(92)に対するスクルージの怒りをアイロニカルに描いている。

しかし、〈クリスマスの祝宴〉に内含された意味をスクルージが把握するためには彼自身がその充実した時間——〈質的時間〉——を体験する必要がある。まず書記のボブ・クラティット家のクリスマスでは松葉杖にすがって歩くちびのティムへのいたわりの中に、素朴な一家のきずなが強調される。彼らのささやかな幸福を実感し、特にティムへの愛着がキリスト教的愛の精神と結びつきスクルージの〈改心〉を一歩大きく前進させることは既に触れた通りである。その〈改心〉のあらわれとして、マルサスの『人口論』に象徴される弱者切り捨て的功利主義思想への激しい怒りがほのめかされている。

スクルージはさらに甥の家でくりひろげられる祝に我を忘れて参加し、〈質的時間〉を体験するが重複を避けるためにここでは略す。

さて、〈未来〉を予示する第三の精霊は〈死〉のイメージをもった不吉な存在である。彼は〈黒い装束〉に身をかため謎めいた暗さと冷たさを感じさせ、現在のクリスマスの精霊が醸し出していた明るさ、若さ、豊穣のイメージとはまったく異質なものである。〈未来〉とは〈過去〉のように一応既に確定したものでもないし、また〈現在〉のように現に明白なものでもない。まさにそれは謎に包まれ予測しがたいものなのだ。

> 精霊はまっ黒な衣に包まれていて、その頭も顔も体も蔽いかくし、ただ一つのさしのばした手のほかは何も見えるものがなかった。……スクルージはその不思議な存在が自分の心を厳かな畏怖の念で充たすのを感じた。(110)

謎めいた精霊はスクルージとちびのティムの死を告知する。スクルージは自己の死がいかに人々から無視されてい

るかを知るが、同時にその態度こそかつて死者に示した己れのものであったことを認識する。取引所でかつての商売仲間や、むさくるしい露地裏のいかがわしい人物達から一顧の同情も得られない自己の死は孤独感を一層スクルージの胸に刻み込む。死は絶対的隔絶であり、最も孤独を強いられる。かつてのスクルージは意識的に他者との隔絶を求め、孤絶を楽しんでいた。しかし、「これまでのわたしとまったく違った人間に生まれ変わりたいと思っている」(118)スクルージには死は今や最も怖ろしいものである。己れ自身の死の恐怖は言うまでもないことだが、ティムの死に対する異常な関心は人間的きずなの破綻を恐れることであり、ここにスクルージの強い連帯意識の萌芽を見ることができる。その意味で、虚構の未来におけるスクルージの死は今生れ変わりつつあるスクルージが脱ぎ捨てつつあるしかばねとも言える。語り手は〈死〉を〈永遠の生〉に変容できる可能性について説教調で次のように語っている。

おお、冷たい、厳しい、恐ろしい「死」よ。ここに汝の祭壇を設けて、汝の意のままになる数々の恐怖をもって、その祭壇を飾れ――こは汝の領土なれば！　しかしながら、ひとに愛され、崇められ、尊ばれたる者の頭からは汝はその髪一本すらも汝の恐るべき目的のために動かすことはできない。……その手は生きていた時、気前よくおうようで、誠実だったからである。心臓は雄々しく、温かで、やさしかったからであり、脈搏は人間の脈搏だったからである。刺して見よ、死の神よ、突いてみよ！　さらば、その傷よりはその者の善行がほとばしり出で、この世に不滅の生命を蒔きちらすのを見るであろう。(118)

死の神と対比されているのは傷口から血をしたたらせている十字架上のキリストのイメージである。キリストの傷口から流れ出るものは永遠の生命を与える水と血である。こうして、現世での善行者（悔い改めた者）は永遠の生命を与えられる。つまり、〈再生〉を約束されるのである。スクルージは今この言葉をすなおに受け容れることができるようになっている。

以上、物語内の虚構の過去、現在、未来の意味とそれらがスクルージに及ぼす影響と彼の反応の姿を検討した。次章では〈改心〉したスクルージの意識と時間意識との関連

を吟味したい。

(四)

クリスマスの翌朝、スクルージは自足し、すべての重荷からの解放感に浸っている。

「わしは鳥の羽毛のように軽いぞ。天使のように楽しいぞ。小学生のように愉快だぞ。わしは酔っぱらいのように目がまわるぞ。やあ、みんなクリスマスおめでとう！　世界中の人々新年おめでとう！　やあ、ここだ！　ほおい！　おうい！」(127)

彼の心は高揚し、喜びにうち震え、陶酔状態にある。大人の理性は吹っ飛び、心は子供の意識に近くなっており、感覚的に他者の世界に参加することにより、世界を知覚するようになっている。この精神の解放は〈時間からの解放〉に最も明白に表われている。

「今日は何日になるかわからんわい！　わしは精霊たちと幾日ぐらい一緒にいたのか、それもわからん。わしは赤ん坊みたいなものだ。いや、それでいい。かまうことはない。おうい！　ほうい！　やあここだ！」(128)

「今日は何日だかわからない」という言葉は時間意識の混乱に対する不安の表明ではなく、過去、現在、未来の区別が失われ、〈永遠の現在〉があるのみだということを意味している。幸福が幸福たるゆえんのものは常に一つ、忘却の世界に浸ること、換言すればある期間非歴史的に感じる能力であるとボルノウは『気分の本質』[6]で述べている。また、E・L・ギルバートはスクルージの〈改心〉を〈幼児への回帰〉と捉えていることは既に述べた通りである。幸福は過去と未来を忘れ、純粋に現在に没頭しうる能力だとすれば、フェッウィッグ老人の舞踏室や、クリスマスを祝う甥の家におけると同様、スクルージは今そのような能力を身につけたと言えよう。

さらに、スクルージは自我開発と統合のプロセスの最終段階に進み、人類全体に対する関心を表明する。最終節に示される三つの行動は新しいスクルージを浮き彫りにし、

その各々の行動はかつてのアイデンティティと対照的な新しいアイデンティティを確証する。すべてが再生し、洗われ清められた朝、彼の感覚に訴えるものはすべてすばらしいものとなる。教会は「これまで聞いたことのない愉しい音をひびかせ」(128)、物語冒頭の暗く寒い情景と異なり、「もやも霧もない晴れた澄んだ愉快な、さわやかな朝」(128)にまず彼は匿名でクラティットの家に七面鳥を贈る。次に通りで寄付集めの紳士と再会し相当の額の義捐金の提供を申し出る。

ディケンズはスクルージの〈改心〉の物語の最後を『キャロル』の〈時間要素〉を象徴する行為で締めくくっている。クリスマスの翌朝、書記のボブ・クラティットは「まるまる十八分三十秒遅れて」(132)出勤して来る。しかし、スクルージはそれをとがめようとはしない。

「よう!」とスクルージはできるだけいつもの口調に似せるようにして、
「いま時分出てくるのはどういうつもりなのかね?」
「どうも相すみません、遅刻してしまいましたので」
とボブ。
「遅刻か?」とスクルージはその言葉をくり返して、
「そうだ、遅刻したものと思うね。ちょっとこっちへ来たまえ」
「一年に一度のことですから」とボブはタンクから出て来ながら弁解した――「もう二度といたしません。昨日とても面白く騒いでしまったものですから……。」(132)

ボブ・クラティットは時間に遅れた。彼自身クリスマスの時間から離れられずにいるが、その効果がスクルージに及んでいることに気づかない。そしてその効果は利得を離れた時間の勝利という形でスクルージの意識に表われている。彼はボブが遅れたという根拠をもとに逆説的な結論を引き出す。

「わしはもうこういうことは我慢できない。そこでだ、……わしは君の俸給を上げてやろうと思っている。」(132)

鮮やかな〈時間価値〉の逆転はそのままスクルージの意識

の逆転であり、さらに言うなら、〈改心〉の成就を象徴している。

したがって、「わたしは過去、現在、未来に生きましょう」というスクルージの言葉は次のように解釈できると思われる。過去、現在、未来の三つの時間の融合ないし統合がもたらす〈幸福〉の心的状態を述べたものであると。過去は現在に統合され、現在の一部になった時にのみ価値を持ち、未来もまた現在に統合されて、再び新たなものにしうる時に限り価値を持つ。現在は未来を予示するのみならず、未来を現実化できると同時に、過去を捉えて新たな意味を与えてまったく異質な未来に変容できるという意味で価値が生まれる。過去は単に過ぎ去ったものとしてではなく、現在において新たな意味を持つ。現在において新たな意味を持つとは現在そのものの有力な成立要素を形づくることである。

同様に、未来も単に何かはるかな時点できっと現われるはずのもの、従って現在と無関係なものというのではなく、未来ももっと根本的なもので、現在の中に課題として、目的としてあるいは希望として含まれるものでなければならない。こうして過去も未来も現在の不可分の構成要素をなしている。そして、体験されつつある瞬間はそれ自身の中に過去、現在、未来を統一的全体として含み、一つの豊かな組織を構成することになる。この豊かな統一体こそ〈幸福〉の源泉である。そこには不安や脅しとしての未来もないし、圧迫や困難の意識をもたらす過去もない。あるのは現在の幸福な状態が無限に広がる陶酔的な無時間の世界である。この幸福の瞬間を味わっている人間はもはや時間に注意を払わない。むしろ時間を超越しているのである。時間意識は失われるが、空虚な無がそこを充たし衰退現象を起こすのではない。そうではなく、それは積極的な独自な性格、新しいこれまで知られないままになっていた意識を体験することを意味する。

以上、『クリスマス・キャロル』を時間的次元から解釈を試みた。ここではあくまで作品世界を対象に論じたので、スクルージの社会的位置づけやそれに伴う時代背景や時代思潮については一切はぶいてある。

〔注〕

(1) テキストは Penguin Books, ed. with Introduction and Notes by Michael Slater, (1979) を使用。引用の

頁はそれに従う。以下『キャロル』とする。

(2) たとえば、Edmund Wilson の "The Two Scrooges" *The Wound and the Bow* (Oxford Univ. Press, 1965), 1–104. あるいは、Humphry House: *The Dickens World* (Oxford Univ. Press, 1942) に収められた『キャロル』論は有名。

(3) Robert L. Patten, "Dickens Time and Again" *Dickens Studies Annual*, Vol. 2, 163–196.

(4) さらに、語り手が読者に語りかける情況を〈読者の時間〉と名づけられようが、ここでは省略する。スクルージの体験とは無縁な世界だからである。

(5) G. H. Ford, "Dickens and Voices of Time," *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 24 (1970), 429–448.

(6) 『気分の本質』O・F・ボルノウ、藤縄千艸訳（筑摩書房、一九七三年）特に第十章「幸福な気分の時間性」130—143頁。

その他「ディケンズと時間」について参照した論文、著書。

(1) Franklin, Stephen L., "Dickens and Time: The Clock without Hands." *Dickens Studies Annual*, 4 (1975), 1–35.

(2) Raleigh, John Henry, "Dickens and the Sense of Time," *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 13 (1958–1959), 127–138.

(3) Buckley, Jerome Hamilton: *The Triumph of Time: A Study of the Victorian Concepts of Time, History, Progress*, and *Decadence*, (Cambridge, Mass., 1966).

(4) Duane, Browne Gerald: *The Significance of Time in the Novels of Charles Dickens* (Univ. Microfilms, Inc., Ann Arbor, Michigan). これは Wisconsin 大学に提出された博士論文（一九七一年）。

(5) Rogers, Philip E.: *Dickens and the Image of Time* (Univ. Microfilms, Inc., Ann Arbor, Michigan). これも Illinois 大学に提出された博士論文（一九六七年）。